

保育者志望学生が子ども達に見せたい動物の移り変わりと 見せたい理由

高木 義栄

Transitions of the Animals which Early Childhood Course Students want to
show Children and the Reason that they want to show those

Yoshihide Takaki

Abstract

About best 3 of the animals which early childhood course students want to show children, score depending on order were given to each animal and were totaled by each year. Several tendencies were seen when the changes of score in chosen animals were analyzed, e.g. the animals acquiring high score throughout and the animals whose score fluctuated by a year. On the other hand, the animals whose score increased by renewal of the display area were also seen. The main reasons chosen as best 3 were to have some kind of distinctive physical features, having some kind of behavioral characteristics and distance and/or spatial easiness in observing. Besides, several unique reasons were seen, e.g. appearing in picture book and song, uttering a characteristic voice or sound and resembling Homo sapiens. For the animals which hardly moves such as nocturnal mammals, some avian species or reptiles, a plan of observation method by childminder is required so that those animals are chosen as the animal which a person wants to show children.

Key words: animals which early childhood course students want to show children, distinctive physical features, behavioral characteristics, easiness in observing, plan of observation method

1. はじめに

林 (2008)¹⁾は、日本の動物園が一般の人だけでなく幼稚園や保育園の遠足でも遊園地的に利用されがちであることを指摘し、利用者側の工夫によって動物園が本来有する教育の場としての役割を活かした保育実践について述べている。また、幼稚園教育要領や保育所保育指針、幼保連携型認定こども園教育・保育要領の各環境領域では平成29年の改訂後も引き続き、“生き物”とのかかわりを通した生命の尊さへの気付きや豊かな感性の養育を目指

しており²⁾、その達成方法の1つとしての動物園見学では、林(2008)¹⁾に記された保育実践方法が有効であると思われる。

一方、福岡市動物園では、2006年度から20年計画でリニューアルが進められており、2009年度から2013年度にかけて「アジア熱帯の溪谷エリア」の整備が進み、現在は次の計画が進められている³⁾。「アジア熱帯の溪谷エリア」では、オランウータンやコツメカワウソなどの動物で、旭山動物園で注目を集めた“行動展示”が試みられている。

近畿大学九州短期大学保育科では、環境領域の講義の一環として動物園実習を実施し、林(2008)¹⁾の保育実践方法を採り入れ、実習後にはグループごとに見せたい理由とともに“子ども達に見せたい動物ベスト8”の発表を行っている。このベスト8のねらいは、見せたい動物が個人あるいはグループで異なることに気付いてもらうことにあるが、年ごとにまとめるとある程度の傾向が見られる。しかし、「アジア熱帯の溪谷エリア」の完成とともに、見せたい動物の傾向に変化が感じられるようになった。

そこで本研究では、ベスト8のうちベスト3に挙げられた動物に点数をつけて各年ごとにまとめ、ベスト3に挙げられる動物にどのような傾向・変化がみられるのかを明らかにするとともに見せたい理由について分析した。

2. 方法

2012年から2018年までの各動物園実習後に、子ども達に見せたい動物ベスト8をまず個人で決め、その後話し合いによってグループのベスト8を決定した。グループのベスト8を決める際は、多数決による決定をしないことを条件とした。2012年は、近畿大学附属九州短期大学保育科1年生67名、福岡県立大学2年生27名、専門学校(A校、B校、C校、D校、E校、F校、G校、H校の計8校)3年生114名に対して行った。2013年は、近畿大学附属九州短期大学保育科1年生58名、福岡県立大学2年生32名、専門学校(2012年のA校とE校を除いた計6校)3年生94名に対して実施した。2014年には、近畿大学附属九州短期大学保育科1年生69名、福岡県立大学2年生26名、専門学校(B校、C校、D校、F校、G校、I校、J校の計7校)3年生126名に対して行った。2015年は、近畿大学附属九州短期大学保育科1年生75名、福岡県立大学2年生26名、専門学校(2014年と同じ7校にH校を加えた計8校)3年生145名に対して実施した。2016年には、近畿大学附属九州短期大学保育科1年生67名、福岡県立大学2年生30名、専門学校(G校3年生、H校3年生、L校1年生と2年生の計3校)133名に対して行った。2017年には、近畿大学附属九州短期大学保育科1年生57名、専門学校(C校、D校、E校、F校、G校、J校、M校の計7校)3年生192名に対して行った。。2018年には、近畿大学附属九州短期大学保育科1年生57名、専門学校(E校、F校、I校、M校、N校、O校、P校、Q校の計8校)3年生131名に対して行った。

見せたい動物の傾向の複雑さと結果の煩雑さを避けるため、本研究ではベスト8のうちベスト3の動物についてのみ数値化して分析した。また、本研究の目的上、動物の数値化お

よび分析において学歴や年齢などについては考慮せず、調査年ごとに全参加学生を 1 つのグループとして分析した。

2-1. ベスト3に名前の挙がった動物の数値化、傾向の分析

動物園実習での各グループのベスト3に挙がった動物について、1位=3点、2位=2点、3位=1点として点数をつけ、各グループでのそれぞれの動物の点数を年ごとに合計して、その年の各動物の合計点を算出した。分析した7年間のうち、4年以上で名前の挙がった動物20種類について、合計点の年変動を5種類づつグラフで表した。7年間のうち3年以下で名前が挙がった動物については、グラフでは示さず本文中で触れるにとどめた。ウサギとモルモットについては、それぞれ単独で選ばれるよりも2種まとめて選ばれる年が多かったため、「ウサギ&モルモット」としてまとめて分析した。

2-2. 見せたい理由・ポイント

7年間のうち4年以上で名前の挙がった動物20種類については、見せたい理由およびポイントを表に示した。個々の理由およびポイントを記すにあたり、なるべく端的な表現となるように簡略化し、意味や内容が似通っているものは同一の理由としてまとめた。また、7年間のうち3年以下で名前が挙がった動物については、適宜本文中で触れるようにした。

3. 結果と考察

ベスト3に名前の挙がった動物の傾向・推移

動物によって傾向は異なるが、ニホンザル・ゴリラ・ライオン・キリン・ゾウの5種類の動物の点数が高かった(図1)。特にニホンザルの人気は一貫して高く、毎年40点以上を記録していた。一方、ライオンやキリンは20点前後になった年もあり、人気の波が見られた。また、キリンでは2012年の圧倒的人气から低下傾向が続いており、この間に個体の入れ替わりがあった影響かもしれない。ゾウは2016年、ゴリラは2015年を境に点数が急降下しているが、それぞれの年に飼育個体が死亡したことが原因と考えられる。しかし、死亡

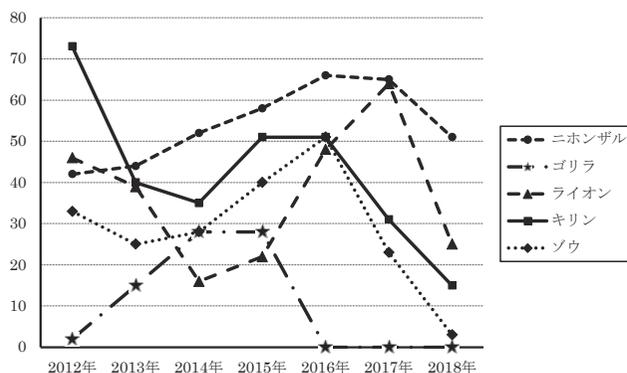


図1 ベスト3に名前の挙がった動物の点数の推移(その1)

して見られなくなった年にもゾウの名前は挙がっており、ゾウの人気ぶりが伺える。

オランウータン・レッサーパンダ・コツメカワウソ・ヒョウ・ペンギンは、上記の5種類に次いで点数が高かった(図2)。これらの種では、年によって点数がある程度の変動を示していた。オランウータンは、「アジア熱帯の溪谷エリア」が完成した2013年と翌年に点数が高かったが、それ以後は低下した。行動展示による綱渡りをよく行う個体の死亡が影響したと考えられる。ヒョウとコツメカワウソについては、多少の変動があるものの上昇傾向にあり、行動展示による工夫が功を奏しつつあると思われる。ペンギンでは、2012年以降に下がり気味であった。リニューアル前は水中での様子が見られたが、現在の展示場所では泳ぐ姿は見られるものの水中は観察できなくなったことが原因かもしれない。レッサーパンダでの年変動については、暑さが苦手な動物のため屋外に出てくる機会の少なかった年で点数が下がったように思われる。

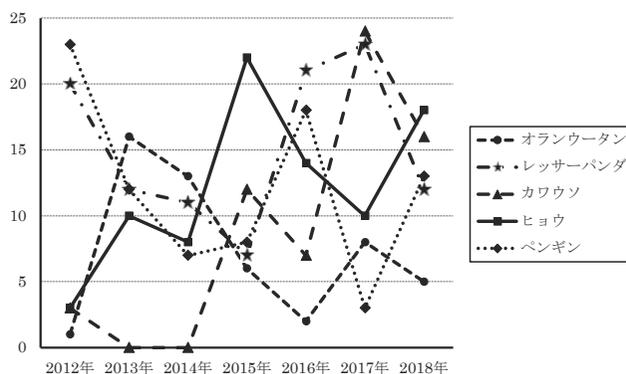


図2 ベスト3に名前が挙がった動物の点数の推移(その2)

チンパンジー・トラ・シマウマ・マレーバク・カバの5種類は、これまでの10種類と比べると点数は低いですが、大幅に点数が上がる種も含まれていた(図3)。特に、チンパンジーは極端に点数が変化し、10点を超える年もあれば名前が挙がらない年もあった。唾をとばされたといった印象的な場面に遭遇した年に点数が上がったと考えられる。トラは、ライオンの点数が低い時に点数が高くなる傾向があった。ライオンの隣に展示されており、ライオンと比較して名前を挙げる人が多いように思われる。シマウマとカバは、チンパンジーほどではないが点数が変動し、名前が挙がらない年もあった。チンパンジーと同じく、印象的な行動などの有無が点数に影響しているのかもしれない。マレーバクは他の動物と違い、点数が上昇傾向にあった。実習の際、林(2008)¹⁾の保育実践方法をもとにしたマレーバクの特徴に目を向けさせる課題を出しているため、その成果が表れているのかもしれない。

名前が挙がらない年があって点数も低いのが、ツキノワグマ・シロサイ・ウサギ&モルモット・ダチョウ・フラミンゴの5種類であった(図4)。ツキノワグマでは、リニューアルに伴う展示場所の移動とともに低いながらも点数が上がっていた。以前より展示場所が広く、動きが見られるようになったことが影響していると考えられる。ダチョウやフラミンゴ

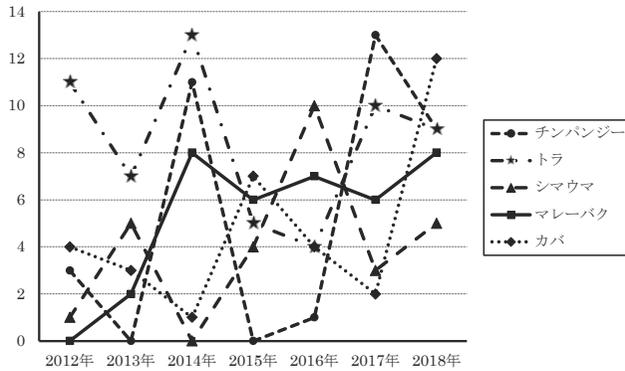


図3 ベスト3に名前の挙がった動物の点数の推移 (その3)

の名前を挙げたのは、それぞれの年の1～2グループのみで、少数派から支持される種と言える。ウサギ&モルモットは、福岡市動物園における数少ない“触れる動物”であるが、触れる時間帯が決まっているため、実際に触った経験をしたグループのみが上位に挙げたと考えられる。シロサイは2016年10月末に死亡したが、ゾウとは異なり、見られなくなった2017年以降は名前が挙がらず、ゾウほどの人気は得ていないように思われる。

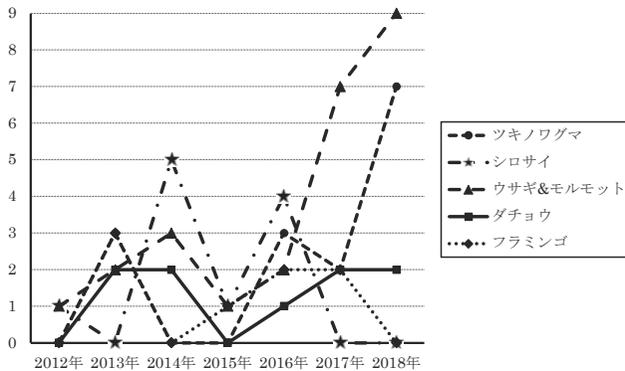


図4 ベスト3に名前の挙がった動物の点数の推移 (その4)

図1～4に示された動物以外でベスト3に名前の挙がった動物のうち、オオバタン・コンドル・テナガザル・カンガルー・フクロウ・タヌキ・コウノトリ・クジャク・ツシマヤマネコは複数回で名前が挙がったが、いずれも点数は1～3点と低かった。マレーグマは2015年に6点となったが、他は2017年と2018年に1回ずつ名前が挙がったのみだった。これらの他に名前の挙がった動物は18種類いるが、いずれも7年間で1回のみであった(ヒツジ、キョン、バーバリーシープ、アラビアオリックス、ユリカモメ、ツシマテン、ビントロング、エミュー、オオワシ、トカゲ、ヤマアラシ、ダイアナモンキー、オウギバト、ヒクイドリ、ブラッサグェノン、カンムリヅル、ビルマニシキヘビ、ホンドテン)。また、7年間で1度もベスト3に名前が挙がらなかった動物は59種類だった。

見せたい理由・ポイント

調査期間中4年以上で名前の挙がった動物20種類について、選んだ理由・ポイントを表1-1および表1-2に示した。これらを比較検討すると、学生が選ぶ動物を決める際にいくつかの共通するポイントがあることが分かった。一つは、動物が有する顕著な身体的特徴によって選ぶ傾向があり、キリンの長い首・舌、ゾウの長い鼻、ライオンのタテガミ、トラやヒョウ・シマウマ・マレーバクの模様、カバの大きな口、シロサイの角、フラミンゴの羽色などが該当する。表1-1および表1-2に示された動物以外にも、ヒツジ（体毛）やアラビアオリックス（角）、カンムリヅル（冠羽）、クジャク（オスの羽色）が身体的特徴によって名前が挙げられていた。また、大きな体や迫力があるといった、顕著ではないが身体的特徴によって選ばれた動物もあり、ゴリラやツキノワグマ、ダチョウがこれに当たる。ライオンやゾウ、トラ、カバ、シロサイは、こちらの理由でも選ばれていた。表に示された動物以外では、コンドルやオオワシも大きさと名前が挙がっており、反対に体が小さいことでキョンの

表 1-1. 子ども達に見せたい動物に選んだ理由・ポイント（その1）

	選んだ理由
ニホンザル	ヒトに似ている、動きの多様性、個体間の関係、個性がある、活発、数が多く見やすい、親子関係が見られる、集団行動、見てて飽きない、ボス探しが楽しい、様々な角度から見られる、雄・雌・子の区別がしやすい、様々な発見がある、赤ちゃんがかわいい、赤い顔・お尻
ゴリラ	ヒトに似ている、大きく迫力がある、珍しい、食事の様子、自分の方を向いてくれた、道具を使う様子、怒った顔、近くで見られる
ライオン	迫力がある、かっこいい、百獣の王、雌雄の違い、定番・人気がある、咆哮、食事の様子、大きさ、怖さ、タテガミ、強そう、トラ・ネコとの違い、目の鋭さ、絵本に出てくる、かわいい、普段見られない、近くで見られる、ツメ・キバ
キリン	首の長さ、大きさ、舌の使い方・長さ・色、長いまつげ、眉毛がある、体の模様、食事の仕方・口の動き、背が高く見やすい・近くで見られる、足の細さ・長さ、つぶらな瞳、人気がある、かわいい、歩き方、活発、首をかく様子・柔軟性、雌雄の大きさの違い
ゾウ	大きい体、鼻の長さ・器用さ・使い方、迫力がある、定番、食事の様子、砂かけ・水かけする姿、大きい足・耳・ウンチ、近くで見られる、絵本・歌に出てくる、目、鼻の穴、におい、動き
オランウータン	ヒトに似ている、網渡りする姿やタワーを登る姿、近くで見られる、毛深さ、人懐こい、表情・仕草、大きさ、頭の良さ、指紋がある
レッサーパンダ	かわいい、近くで様々な動きが見られる、食事の様子・餌、寝姿、癒される、尻尾がフサフサで個体によって色が違う、木に登る・木の上を歩く姿、パンダとの違い、手の器用さ、普段見られない、意外と大きい、ふわふわな体毛、子どもが興味を持ちそう、活発、目
コツメカワウソ	工夫された展示で様々な行動が様々な角度で見られる、かわいい、陸と水中両方の様子が見られる、活発、ロープを齧って回る姿、集団行動、食事の様子、俊敏性、泳ぐ速さ、水かき、体毛、寝姿、人懐こい
ヒョウ	工夫された展示で普段見られない部分が様々な角度で見られる、迫力がある、体の模様、近くで見られる、かっこいい、咆哮、寝姿、親と子の違い、自然の姿が見られる、肉球、子どもがよく集まっていた
ペンギン	かわいい、泳ぐ姿と歩く姿の両方見られる、歩き方、鳴き声、泳ぎ方と速さ、におい、イメージとの違い、様々な体勢が見られる、目、近くで見られる、頭数が多い、尻尾、寝姿、親と子の違い、クチバシ、おとなしく見やすい、子どもくらいの大きさ

名前が挙がっていた。

身体的特徴でなく、活発であるとか動きの面白さ・特殊性・多様性といった、行動面での理由から選ばれた動物も多かった。活発に動くことが理由で選ばれた動物には、カバやツキノワグマなどがあるが、表に示された動物以外でもマレーグマやテナガザル、ホンドテン、ツシマテンが活発に動くことで名前が挙がっていた。一方、ニホンザルは、活発に動くことだけでなく行動の多様性が選んだ理由として多かった。また、レッサーパンダとコツメカワウソは、活発に動くことに加えて動きの多様性・特殊性が理由として多く、レッサーパンダは木に登り樹上を歩く行動、コツメカワウソはロープを銜えて回転する行動が選んだ理由になっていた。動きの特長性としては、ゾウの砂浴び・水浴び、オランウータンやテナガザルの綱渡り、マレーバクの排泄（マーキング）も選んだ理由となっていた。この他、チンパンジーを選んだ理由として、動きの面白さ・多様性が挙げられていた。一部の動物では、時間帯によるが食事風景を見られることがあり、ゴリラ・ライオン・オランウータン・キリン・ゾウ・レッサーパンダ・コツメカワウソ・マレーバク・ツキノワグマで「食事の様子」が選んだ理由として挙げられていた。キリンでは「食べてる時の口の動き」もポイントとして見受けられた。ニホンザル・ペンギン・コツメカワウソ・バーバリーシープでは、頭数が多いこともあって「集団行動」を理由とする学生も多かった。さらにニホンザルでは、個体間の関係性という他種では見られない理由も多く見られた。

表 1-2. 子ども達に見せたい動物に選んだ理由・ポイント（その2）

	選んだ理由
チンパンジー	ヒトに似ている、近くに来てくれた、唾をかけてくる、ヒトとの違いを探るのが楽しい、表情、遊具を使う様子、様々な行動が見られる、動きが面白い、頭の良さ、上手な食べ方、活発
トラ	迫力がある、かっこいい、大きさ（想像より大きい）、ライオン・ネコとの違い、強そう、体の模様、近くに来る、大きい顔、寝姿、目
シマウマ	体の模様、美しい脚、かわいいお尻、親しみやすい、鳴き声
マレーバク	珍しい・初めて見た、マーキング（排泄）の仕方、体の模様、大きさ、夢を食べるといふ伝説がある、不思議なイメージがある、かわいい、鼻、目、長い顔、食事の様子、指の数、ブラッシングされてる姿、ぼーっとしている姿
カバ	大きさ、迫力がある、大きい口、水浴びの様子、泳ぐ姿、水に潜る様子、見た目のわりによく動く、皮膚の質感、目、癒される、絵本・歌に出てくる、飼育員とのコミュニケーション、大量の餌を食べる姿
ツキノワグマ	迫力がある、大きさ、活発、ヒトに慣れている、食事の様子、かっこいい、首を振る姿、寝姿、かわいい
シロサイ	大きさ、角、岩のような体、食事の際に出る音
ウサギ・モルモット	触れ合える・餌やりができる、小さい、かわいい、子どもに人気がある、絵本などで身近な存在、どこの園にもいる
ダチョウ	愛嬌がある、近くで見られる、1番大きい鳥、足、指の数、目、上品な歩き方、鳥だけども異質な存在
フラミンゴ	美しいピンクの羽、きれい、大きさ、寿命の長さ、カラフル

身体的特徴、行動面以外の選んだ理由として多かったのが“見やすさ”で、「近くで見ら

れる」といった距離的なものと「様々な角度から見られる」といった空間的なものがあった。これらの理由で選ばれた動物のうち、オランウータンやゾウ、コツメカワウソ、ヒョウは、2013年の「アジア熱帯の溪谷エリア」の完成によって行動展示がなされている動物で、展示方法が成功していると言えるだろう。一方、テナガザルとマレーグマも同エリアで行動展示がなされているが、あまりベスト3に名前が挙がっていない。これらの動物は、行動展示を目的とした建造物を利用している時と利用していない時があり、利用していない時の方が多い。そのため、たまたま利用している時に見た学生のみが上位に名前を挙げていると考えられる。表に示された動物以外では、ビルマニシキヘビが行動展示されており、「近くで見られる」という理由で選ばれた。しかし、ほとんど動かないために上位には選ばれなかったと思われる。行動展示がなされていない動物では、ゴリラ・ライオン・トラ・キリン・ダチョウが、展示スペースの構造上「近くで見られる」という理由で選ばれていた。また、ニホンザルとレッサーパンダは、展示スペースの構造から「近くで見られる」かつ「様々な角度から見られる」という理由が多く見られた。ペンギンは、水中の様子が見られたリニューアル前では距離的かつ空間的見やすさが理由として見受けられたが、リニューアルに伴う展示スペースの移動後は距離的見やすさのみが理由として挙げられた。

特殊な理由の1つとして、ゴリラやオランウータン、チンパンジーといった類人猿では、「ヒトに似ている」という理由が多く見られた。また、これらの動物とコツメカワウソ・ツキノワグマを選んだ理由では「人懐こい」という項目も散見された。人懐こいために近くに来てくれたことが印象的だったと思われる。ライオンやトラでは相互の違い、ネコとの違いが選んだ理由として挙げられた。多種との違いという理由では、表に示された動物以外のビントロングがタヌキ、オウギバトがドバトとの違いを挙げられていた。選ばれた理由のうち、ライオン・ヒョウの咆哮やペンギンの鳴き声、1例だけがヤマアラシのとげを出すときの音といった音声的な理由も見受けられた。似たような理由として、オオバタンでは返事をしてくれる、しゃべるといったインコ類特有の理由もあった。他にも、絵本・歌に出てくる（ゾウ、ライオン、カバ、ウサギ、タヌキなど）といった理由や、陸上と水中両方の姿が見られる（コツメカワウソ、ペンギン）、絶滅危惧種（ツシマヤマネコ）・天然記念物（コウノトリ）でめったに見られないといった理由も少なからず見受けられた。

4. まとめ

子ども達に見せたい動物を選ぶ場合、その動物に1. 何らかの顕著な身体的特徴、2. 行動面での特色、3. 距離的あるいは空間的な見やすさ、のいずれかが備わっていると選ばれやすい。また、頭数が多く集団行動や個体間の関係性が見られる、食事の様子が公開されている、絵本や歌に出てくる、特徴的な声・音を出す、珍しい（絶滅危惧種や天然記念物など）、ヒトと似ている、人懐こい、水陸両方で活動する、といった条件も選ぶ際のポイントになる。一方、これらのいずれかを備えていても選ばれない動物も存在している。理由は種によって異なり、中には理由がよく分からない種もいる。しかし、ベスト3に名前が挙がらなかった

動物の特徴から推測すると、選ばれない理由は“姿が見えない”あるいは“ほとんど動かない”のどちらであると考えられる。

カササギサイチョウやベンガルヤマネコなどは、距離的には近くで見られるはずだが展示スペースに死角があり、そこに居る時は角度を変えても見るができない。見物者の中には、「何もいない」とすぐに立ち去ってしまう者がいた。ベスト3に挙げたこともあるビントロングの展示に死角はないが、見学者は見るができない寝室内に居ることが度々あって何もいないと勘違いされることがあった。探すのが楽しいという意見もあったが、やはり姿が見られないと見せたい動物にはならないだろう。

“ほとんど動かない動物”の多くは鳥類と爬虫類だったが、オオコウモリやキツネ・イノシシなどの夜行性哺乳類も含まれていた。鳥類、特に猛禽類のほとんどは本来の行動圏よりはるかに狭いスペースで展示されているため、動くことが少ない、あるいは動けないのだろう。一方、ライオンやヒョウなどのもともと夜行性で寝ていることが多い動物でも、身体的特徴などの他の要因を備えていれば選ばれることが多くなるし、レッサーパンダやコツメカワウソのようにかわいい印象があると寝姿が選ばれるポイントになることもある。

不思議なのはシシオザルやヤギ・ツシマジカで、選ばれやすいポイントを少なからず備えているし、展示スペースに死角もない。何が原因で選ばれないのか、よく分からないが、シシオザルに対してはニホンザル、ヤギとツシマジカに対してはキリンといった、人気の高い似たような種が存在しているためかもしれない。

動物園の持つ教育の場としての役割を活かした保育実践のため、動物の見学方法の工夫は欠かせない。展示スペースに死角がある場合は動物園側の努力に期待するしかないが、猛禽類や夜行性哺乳類、爬虫類のように動かないけど見やすい動物については、保育者による見学方法の工夫次第で子ども達に見せたい動物に変わりうる。実際、調査当初は人気がなかったマレーバクは、その特徴に目を向けさせる課題によって少しずつだが選ばれるようになってきている。もちろん、タヌキやキツネのように地味でほぼ動かない動物で同様の効果をあげるような工夫はかなり難しいだろう。しかし、そこは保育者の力量が試される場面と言える。

5. 参考文献

- (1) 林幸治 (2008) 「幼児教育における動物園の役割—動物園を楽しむ 発見!! キリンの眉毛—」 『近畿大学九州短期大学研究紀要』 第38号 49 - 58 頁
- (2) 内閣府・文部科学省・厚生労働省 (2017) 『平成29年告示 幼稚園教育要領 保育所保育指針 幼保連携型認定こども園教育・保育要領』 チャイルド本社
- (3) 福岡市動物園 (2019) 「福岡市動物園について リニューアル (福岡市動植物園再生事業)」 <http://zoo.city.fukuoka.lg.jp/abouts/renewal>